

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと「風」

第三十一号（二〇〇八年十二月）

風が吹かれて（ ） 白井啓治

『風が流れて幸せのおもつ』

風が冷たくなり、虫の声が土に隠れたと思っただら、早や一年の終わりになってしまう。地球温暖化、異常気象とは言われながらも、風が冷たくなると新しい時を紡ぎだす準備を確実に始める。

地球の平均気温が十度上がるのが、地軸に変動がない限り日本には四季が回り、生息できる種の変化はあるだろうが、この時期には新しい時を紡ぐ準備を始めるのであろう。

昨年の暮れの号であったが、今年の一月の号であったかは忘れたが、ガラクタでも取り敢えず風呂敷包みに包みこんで担ぎ持って歩くことを止め、持ち歩くものを最小にした事を書いた。しかし、一年の過ぎて、振り返ってみると、またまたガラクタを沢山風呂敷に包み込んで首に括り付けてしまっている。

秋口あたりから妙に肩や背筋が凝り、痛みを伴っている。それを誰かに話したら、六十肩です、といわれてしまった。考えてみると、この 肩 というのは、四十代に始まり十年ごとに訪れるものらしい。

最初に体験した四十肩は、四十四歳くらいであった。まさか加齢による筋肉硬化とは理解しがたく、ゴルフの打ちっぱなし練習のやりすぎだと思

っていた。そうしたら最年少の弟子から「四十肩ですわ」と断言されてしまった。彼は、自分の父親もつい最近まで四十肩で苦しんでいた、と言ったのであった。

四十歳の半ばにさしかかっているのだから、四十肩と言われても最初は抵抗なかったのであるが、父もつい最近まで四十肩で苦しんでいました、と聞いた途端自分がどっと老けこんだような気がしたものだ。

で、今また六十肩です、といわれ、己の年をしみじみと振り返りながら、そういえば七十肩とは聞いた事がないのに気付き、これは後期高齢者になる前の大事な若さの証しなのだから肩の痛さを心して感じ取らなければと思ってしまう。

この「ふるさと風」も今回で三十一号となる。三十一号を記念してというわけではないが、今月から嬉しい事が二つ増えた。一つは、風の会への正式入会ではないが、名古屋から旧八郷・瓦谷にやってくる百姓を始めた松山有里さんが原稿を寄せてくれることとなった。春には、正式に会員になっていただけるものと大いに期待している。昨年

は、十一月号から菅原茂美さんが参加され、九月には小冊子「遙かなる旅路」を発行された。風の会への入会はないけれど、行方市浜にお住まいのオカリナ奏者の野口さんご夫妻が時々投稿

下さっている。ふるさとを想う仲間が少しずつ確実な参加を頂けることはとても嬉しいことである。もう一つ、今月から「一三〇〇年の歴史の里・石岡ロマン紀行」というホームページを開いておられる木村さんのご厚意で、そのホームページの中に「ふるさと風の会」のコーナーを設けて頂いた。会報のバックナンバーや小冊子の案内、ことば座の公演案内等が紹介されており、一度ご覧になっていただければと思います。

ひとつの風が吹くと、その幸せに吸い寄せられるようにまた新しい風が吹き始めるものである。

ことば座が、ギター文化館で偶数月の第三日曜日に定期公演を行っているのであるが、その日に駐車場の一角などを借りて、芸術文化市を開きましようよ、という話をされた。そこで早速、ギター文化館の代表木下氏に、そんな話をされたがどうですか、と話したところ、ここがふるさとの芸術文化の発信基地になるようなことだったら、企画をたてドンドンやって下さいとの返事をいただいた。

ギター文化館を発信基地としてスタートしたことは座も来年は三年目を迎え、大きくジャンプしなければと思っていた矢先に、芸術文化市を開きましようよ、という話の生れたことは大変嬉しいことである。

風の会、ことば座の方達には、急ぐことはない、しっかり確実に続けていきましよう。必ず望むべき成果がついてきますから、と話してきたのであるが、着実に根を張り、花の蕾をつけ、明日にはその花を咲かせようとしている。

大変嬉しい一年であった。

百姓暮らし三年目に突入

ふたば自給農園 松山有里

一人で畑を耕し、農園を始めてから三度目のそろまめをまいたのは十月末。もうそろまめは本葉を出して、その大きさを敵しい冬を越す準備を始めている。あまり小さすぎても、大きすぎても寒さにやられてしまう。豆の種まきの適期は一週間と短く、特にまく時期を違ふとも言われ、一週間ずれてもだめな場合がある。寒さに向かうこの季節ならなおさらのこと、生死に関わる一週間なのだ。

この二年間を振り返ってみると、よくも一人でやり通すことができたなあと自分で自分を誉めてあげたい気もする。だが、自然の摂理のなかでただただ生かされただけと深く実感した二年でもあった。

八郷は特殊なのか私の畑からは昔の土器のかけらが多数でてくる。初めは瓦の割れたものと思っていたのだが、よくよく見ると教科書でみたことのある模様がついている。それが縄文のものかは定かではないが、決定的なのは八郷の公民館の縄文時代の器などを展示してあるショーケースの中にあるものと全く同じものが、私の畑からも出てきたことだ。だからかけらも縄文のものと思うことにしている。

畑で鎌を振っていると三〇数年前、またはもっと前のお百姓さんと同じ場所で同じことをしている自分と自分の見えて、時空を飛び感覚を非常にうれしく思ったものだが、縄文の三〇〇〇年前までとなるとスケールが違う。

今こうして畑をやっているも「自然と交信して

いる」と感じるものがたまにあるが、縄文のころは人と自然とはもっと激しく親密な交信を交わしていたらと思う。こうして一方的に自然の恵みを与えてくれる自然に人は深々と頭を下げ、恐れ、敬い、願い、感謝して生きていたのだと思う。

私には「神様」というものが、もの心つくころから教育されていたので、今おてんとうさまに頭を下げて「ああ、神様！」になつてしまふのだが、つい最近、それは順序が違つていたので気がついた。

宗教があるから信じ、願うのではなく、自然が神より先にあり、それを「かみ」という名前をつけないと言い表わせなかつたから、人はその言葉を作つたのではないか。今の社会のように邪念で満ちていると、人と自然との回路は閉ざされてしまつていくが、なんとこのような百姓暮らしをしていると、たまにパカッ、パカッとその回路は開くのであった。それはまさに縄文体験だ。

こうして縄文の心に思いを馳せながら自然をみていると、また違つた風景が見えてくる。彼らと同じ目線で、日没後のサーモンピンクに光りだす筑波山を眺め、満月のあかりで道を歩く。日本の神々は本当に人に優しく、近しい存在だ。敬うことで彼らも恵みを約束してくれるのだ。

私は今この現代に生きながら、同時に非常に神話的な世界でも生きていくようだ。この心優しい神々に見守られながら、「ここで百姓三年目に突入。」「安心して耕せ！」

と風の神が耳元でささやく。

ふるさとの物語を殺してはならん 小林幸枝

ことば座の十月公演の時、二〇〇四年の居合道で日本一になられた池田忠男さんが観に来られました。その時、脚本の白井さんから、いつか池田さんと一緒に舞台を創りますからね、と言われ、実現したら嬉しいなと楽しみに思っていました。

ところが、公演が終わって暫くしたら、十二月の公演で、池田さんの居合の演武とオカリナの野口さん、矢野さんと一緒に「鈴が池物語」をやることになりました、といわれびつくりしてしまいました。そして、とても嬉しく、気持ちがいっぱいハイになってしまいました。

どんな風に舞台をつくるのかと思っていたら、早速台本が出来上がり、つくばで行っている池田さんの稽古に参加させていただき、居合とは何かを見学させていただきました。

居合は、真剣の刀を用いておこなうもので、普段の稽古であっても、大会の演武と同様の高い注意の集中と緊張がないと大変危険なものであることを知りました。真剣を取り扱つので、皆さんものすごく礼儀が正しく、稽古のあいだ中、緊張の糸が凜と張りつめていました。

稽古の最後に池田さんの演武を見せて頂きましたが、居合を行う心の緩急と間の取り方には、恐ろしいほどの気迫がありました。

居合の見学に行く前に、チラシの原案を見せてもらったら、未来への警鐘として鳴らされたふるさと物語の火を消してはならん！ 鈴姫の怨念を池田忠男の剣が割り、生まれ出た希望を小林幸枝が舞つ」となっていました。

「ふるさとに伝承されてきた物語というのは、

そこに必ず未来の暮らしを導くための道標が打ち込まれて在るものです。だから、伝承のふるさと物語は大切に、常に新しい風を通して伝えていかなければ、その国（ふるさと）は滅びます」

とは、常に白井さんから聞かされていましたが、伝承を大切に考えない現代の刹那な短絡を、池田さんの剣が打ち払い、そこに生まれる新しい希望を野口さんのオカリナに乗って私が舞えるというのには俳優冥利に尽きるものです。

池田さんの演武には矢野さんのパークッションが緊張の糸としての音を創り出し、母なる優しい希望の願いの音を野口さんがオカリナし、私が風となつて舞います。

二〇〇八年最後の舞台を、来年に確かな形で繋げていけるコラボレーションとして創れることを幸せに思います。

鈴が池物語は、私が初めて舞台に立った時の演目で、その後は私の十八番物として、毎回新しい演出を加えて演じさせて頂いております。今年、二〇〇八年の鈴が池物語は、これぞ鈴姫伝説の伝えたい姿になるだろうと思っています。ぜひご覧いただき、ご批評を頂ければと思っております。

歴史ガイドに同行して(8) 兼平ちえこ

「土橋通りに入ると真正面に陣屋門が見え、子供心にはその偉容は格別でした。行き帰りにその扉や柱に手を触れては親しみを覚え、この門を潜ることによって心構えの切り替えが出来たように思います」

これは昭和十年四月に石岡尋常高等小学校に入学された方の、小学校時代の思い出の一節です。

陣屋門は市民会館建設のために、今では同会館裏側に移され、お役目は閉じられ、今年で二百八十年の命を誇っている姿を思い描きながら、今回の「常陸国風土記を歩く会」の皆さんへのご案内は、土橋通りより 昭光寺、東耀寺、常陸國總社宮をご紹介します。

昭光寺

所在地、府中二丁目四九、宗派浄土宗、本尊阿弥陀如来。応安七年（一三三四）、府中平村の鹿ノ子の地に創建された。開基は、常陸大掾平高幹。開山は、下野国円通寺開山の良善上人。檀越（僧の為に、金品等ほどこす信者）の大掾氏は次第に加藍を整え、府中八十箇寺の中にあつて五大寺に列したという。その後、天正十八年（一五九〇）、府中城主大掾浄幹が佐竹義宣に攻められ落城。その時の兵火に罹り焼失。その後、佐竹義宣の叔父佐竹左衛門尉が寺の消失を悔い、本山、円通寺より称往上人を招き、文禄四年（一五九五）に現今の地に再興を果たした。

この地は府中六名家の一家、香丸氏の屋敷跡といわれる。江戸時代になり、元禄十三年（一七〇〇）には水戸徳川家の支藩である松平播磨守頼隆（水戸光圀の弟）が入封した際、当寺は松平家菩提寺となり、幕府より黒印十石が付与せられ、山内を整備している。江戸後期には、昭光寺学寮と称して学問所として武家の子弟の教育を行い、常時三十名前後の学生が入寮し、勉学に励んでいた。明治六年の石岡小学校創設の際にはその校舎として当寺が利用された。なお、幕末の天狗党の変の折り当寺は田丸稲之衛門派の陣営に用いられ、党

員が柱、鴨居に切りつけた傷痕は、今も残っている。

東耀寺

所在地、石岡市若宮一丁目一十三。宗派天台宗山門派、本尊阿弥陀如来。

明治三十一年の寺院明細帳によると、養老五年（七二二）に創建となっている。舎人親王（天武天皇の皇子）が、常陸国を巡回の折り、霞ヶ浦を船で渡られたが、その時、阿弥陀如来像が船に流れ着いてきたので、親王はそれを拾いあげて、当寺を建立したのが寺のはじめであるという。また筑波山の中禅寺にいて八郷の峰寺、岩瀬の月山寺などを創建している徳一大師の創建との言い伝えもある。

創建当時は法相宗、そして真言宗となり幾度か変遷して、江戸時代、寛永十七年（一六四〇）天台宗となる。慶長七年（一六〇二）に徳川家から除地高十五石を与えられた。

書道の兼子天来、新撰組の鈴木三樹三郎、天狗党の小林豊次郎、生麦事件の佐谷貞三郎の墓がある。

常陸國總社宮

所在地、総社二丁目八一、祭神は伊弉諾尊（いざなぎのみこと）、大国主尊（おおくにぬしのみこと）、素戔嗚尊（すさのおのみこと）、瓊々杵尊（にぎのみこと）、大宮比売尊（おおみやひめのみこと）、布留大神（ふるおおかみ）。

天平年間（七二九～七四九）に天神地祇六柱を国府の南の丘に迎えて創建したといわれている。一般に総社と称する神社は諸国の国府所在地に多く、その創設年代は明らかではない。

総社の始まりについては国府において都の神

祇官と同様、祭神の中心として国内の神社を総括管理するという説。国内の神社を合わせてまつることで、国司が国内の神社を巡拝するのに代えたとする説など、諸説がある。社伝によると始め国家鎮護の社として全国のうち常陸、武蔵、甲斐、駿河、長門、対馬の六国府が選ばれ、常陸国府に第一創建あるべしの勅命により建てられたとある。(石岡市教育委員会、案内板より)

常陸国総社宮例大祭は、九月十四、十六日(この二、三年前から、敬老の日をはさむ三日間)、町内獅子、山車等が練り歩き、三日間で数十万人の人々が賑わう。

社宝 総社文書。この文書は、治承三年を最古として鹿島神宮より古く、天保年間に及ぶ貴重な資料である。三十六歌仙絵馬。これは文龜二年小川城主園部氏の女千代益が寄進したものといわれている。三武将、太田道灌、入野左衛門就景、佐竹義宣の軍扇。

以上、今年最終号として、府中城の濠に架けられた「土橋」に由来する地名、土橋通りに近在する二寺一社のご紹介となりました。出来るだけ多くの皆さまのお手元に届き、お役に立てて頂ければ幸甚に存じます。

一年間、ご愛読頂き誠に有難うございました。お元気で「越年下さい」。

(参考資料：石岡市史、いしおか昭和の肖像、石岡の地名)

必死 なり葉 木枯らし 全力疾走
薄日染めのトランプ

ちえこ

わし塚 うなぎ塚 伊東弓子

つい一か月前、妹の孫達と懐かしい道を通った。そこで、私の得意とする昔話が始まった。

「婆ちゃんの若い頃、此処に鷺塚と鰻塚という小さな山があったの」

今は新しい景色が其処にあるが、その奥に私は以前の山が見える。二つの景色を知っていることが逆も自慢なのだ。更にその前の何千年の歴史が見えてくる。其処に多くの人々の生活の歴史を

繋いで見る事が出来る。それは私に豊かな気持ちを与えてくれる場所だ。更に次の時代の予想等が湧いてきて此処を通ると話さずにはいられない。

「大昔のことだった。台地には木が沢山茂っていて何処までも連なっていた。海原が果てることなく広がって波を寄せては返していた。一羽の大鷺は木々の間を飛び、天上高く舞い上がり地上を常に見回していた。海の中では沖から陸地近くへと大波をたてて一匹の大鰻が天を仰ぎ水飛沫を舞い上げ泳いでいた。或る時この怪物同士が喧嘩を始

ふるさと風の文庫

新刊

ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の
歴史エッセイ「ふるさと風にたずねて」(・)

(二冊組：1000円)

菅原茂美待望の第一作 「遙かなる旅路」(1)(定価：500円)

打田昇三：ふるさと「風にたずねて」(・ / ・)

(二冊組：1000円)

我がふるさとを“風のことば絵”という新しいスタイルのふるさと
表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文集集大成！！

ふるさと「風のことば」 (定価500円)

日々の暮らしの中にふるさとを想う心を詠いたエッセイ集

兼平ちえこ 「風邪に押されて」 (定価500円)

小林 幸枝 「風に舞う」 (定価500円)

白井 啓治「移ろう風の中に」 (二冊組：800円)

近藤治平「風に吹かれて」 (二冊組：800円)

ふるさと風の文庫は、・ギター文化館：0299-46-2457

・いしおか補聴器：0299-24-3881

にて販売しております。

ふるさと“風”の会 事務局

石岡市石岡 13979-2 (白井方)

電話 0299-24-2063

めた。理由はわからない。喧嘩は一寸やそつとでは終わらない大喧嘩となっていた。鷺は大半の羽根を塗り取られ、鰻は体中に傷を負った。それでも止まらず三日三晩も続いて両方とも到頭力つきた。泥塗れ血塗れになって息絶えた。この里の人達はこの二匹をとても可哀想に思つて此処に埋めてやった。それから鷺塚、鰻塚と呼ぶようになったという話だった」

昭和三十三年の秋、文化祭のテーマに「自分達の故郷の伝説」と決めて歩き出した日の事がつい一年位前の様に思ふ。当時茨大の先生だった方や土地の官主さんに教えて頂いた。それから自転車を走らせあちこちと聞いて歩いた。西に向いて右側はぐつと低く田になつて恋瀬川まで続いていた。左側の山の緩い傾斜の端の方に人が歩くだけの曲がりくねつた道があつた。私は其処に立つて見た。草々が生えている向こうに雑木林に包まれて小高い山が曲線を描いていた。それが鷺塚鰻塚だつたと覚えていた。周囲には人家はなかつた。霞ヶ浦の高浜入江として存在していた広い場所を常磐線が横断している。右の岸には高浜駅の低い屋根が見えた。左の岸には占いで知られていた仙間神社の森が見えた。その手前に踏切がある。神社の一部を切り取つて造つた線路だから崇つて事故が多いという話には若い心に恐ろしく聞こえた。踏切の手前に木々の間から屋根が見えるたつた一軒の家が目止まつただけで静かな情景が焼きついている。

本当に大鷺と大鰻だつたのか、もしかしたら大地を治める豪族と海を支配していた大将の争いかそれとも山賊と海賊の戦いだつたか。話を聞いた当時は空想が膨らんだ。伝えられているものには

必ず何かある筈」と思いながらもそのままにしてしまった。

暫くその道を通ることもなかつたが、結婚して実家に急ぐある日通つて驚いた。あの日見た雑木林とその中に見えた塚の曲線はなかつた。あの時は確かにあつた筈だ」と自分に確認をしたが納得できなかった。誰に問い誰に解答を貰つたのか覚えていないが分かつたことは

・あの山は潰してしまつた

・中から刀が一、二ちよう出てきた。それは市の教育委員会の方へ持つていった

という事であつた。その事も気になりながら聞きつばなしで尋ねる事もしなかつた。その後も実家からの帰り道は其処を通つた。いつも夜になつてしまふ事が多かつたが其処には昼とは違つた夜の世界の素晴らしさを見つけた。嘗て海であつた名残を止める田と川の流れも周囲にとつしりと構える台地も長い年月の中で形を変えてきた。そこには人間の手が沢山加えられている。これからも破壊や創造は限りなく繰り返されるのだろう。私も毎日の生活の中でつくつてみたりこわしてみたりを繰り返しているのに気がついた。少しは進歩しているのだろうか。

長い空白の果てにこの秋五十一年ぶりに鷺塚鰻塚の地を尋ねてみる事にした。知つても如何なるものでもないが私が見た物を孫達に見せてやりたかと思つたからだ。それには私自身がよく知ることだと改めて思つたのだ。私から聞いた事を其処に見る事によつて何かを感じてくれる。そこから孫達の生活や歴史に係る想いが育つてくれる事を願つたからだ。

そんな願いを持つて確かめに出かけた。部落の

入口の角の店を尋ねた。品数も少なくなつた店先に留守番のお婆さんがいた。嫁に来た頃村長をしていたお爺さんならもの知りだつた。私は嫁に来たからあまり遠くへは行かないし、世間のことはわかんないという。鷺塚という家はあると教えてくれた。そこから仲買員をしている人に聞き、若い人の家を探ね鷺塚とよばれている家がわかつた。その家から分家した家の人と話し、建築業の人は尋ねるにつれて話が見えてきた。勇気を出す事は不安を喜びにかえてくれた。そして力を与えてくれた一日だつた。夕陽は大部傾いていたが遠い日と同じく枯薄芒が晩秋の風に揺れ、草々に交つて野菊が残り少ない生命を燃していた。

聞いた話から新しい事がわかつた喜びは大きかつた。

鷺塚という屋号の家は鷺塚という地名のある塚の近くに住んでいたからそうよばれるようになった。塚を壊す時この道沿いに屋敷がえしたそつた。中買いの人は子どもの頃隣り部落に住んでいた。鷺塚とよばれていた此処へよく遊びに来たが、山で遊ぶより田の方に降りてしじみとりをしたと話してくれた。

建設業の人はあの塚は壊して恋瀬川の堤防づくりに土を使った。その時俺も若くて人夫として働いた。この道は私道だつたから扶つて田の方へ道をつくりトロツコが通れるようにした。ずい分大変な仕事だつた事をしじみと話してくれた。

塚のあつた鷺塚という所一帯は平になり畑や田となつた。今はビニールハウスが何棟も建つている所だ。土地の持ち主は隣り部落の人で学もあるからいろいろ教えてくれるから尋ねてみるといいと教えてくれた。

そのお爺さん夫婦を尋ねたことよってより詳しい事が分かった。

塚は大部高かった。塚は二つに分かれていてその間には細長く畑があった。北側の方が鰻塚といひ南側の方は鰻塚とよんでいた。全体の姿は前方後円墳とも見える形だった。お婆さんも嫁に来た頃その畑まで歩いていったが昼に戻ってゆつくりすると昼すぎは出かけるのは辛かったという。当時の仕事の様子がしのばれるおもいで聞いていた。塚の高さは電信柱位の高さで松や雑木が生えて傾斜地の草刈りは容易ではなかった。仕事に行く時牛を連れて行ってそこで草を食わせておいた。

一石二鳥という具合。龍神山の波付岩は高い所にあるというが当時の水高はどの位あったのかね。豪族が塚を作るのは結構高い所へ作ったんじゃないかねと聞いてくるお爺さんに対して有耶無耶な返事をしていた私だった。五十一年前の私にはあの塚がそんなに高くは見えなかった臍げな記憶を辿りながら相槌をつっているのに気がついた。あの塚の土が欲しいという話は小さい頃（昭和の初め）からあったと父親に聞いていたが実際には昭和三十五年から三年間かかった工事だった。恋瀬川の高あげをする為に塚を崩した。台地も大部削り低くなって畑、田となった。前の堤防は土を盛っただけなので沈んでいくのでこの時は新しい工事の方法がとり入れられた。掘った時片方のカロウドは潰れてしまったという事だ。あの頃は関心もない頃で調査もしなかったし研究もされなかった様だ。刀は錆びたのが一つ出たが隣の茨大の先生に見てもらい市の方へ持っていった。今あるかどうかわからない。片方の塚からは人骨が二体出た。夫婦とも見えるし大人と子どもとも噂され

たがこの地の寺に頼んで弔ってもらった。カロウドのあった上の方は松の木は育たず枯れてしまっていた。お爺さん夫婦もこの塚に纏わる話は聞いた事がないそう。私が知った鰻と鰻の話は誰から聞いたのだったろう。二体は鰻と鰻と表現されてきたのは二人の豪族か。それとも人間と力の事か伝統の二匹と古墳という史実をどう繋いだらいいのか戸惑いながらお茶をよばれた。

帰り道足を止めて、かつて鰻塚鰻塚とよばれていた所で今農業が行われているという現実をしっかりと目にとめた。言い伝えのある此処に沢山人々が泥塗れ血塗れになって塚を造った時代があった。時が移って新たなものを造った。鰻と鰻は人間そのものだった様に思う。これから人間は泥塗れ血塗れになって何かを造りそれを壊して又何かを造っていくのだからと思う。

私が若い日の思いを暖め続けて改めて分かった事は泥塗れ血塗れになって歴史を作ってきたのは力のある一部の人ではなく名も残らない多勢の人の力だと確信出来たことだった。

進化の方向性

菅原茂美

一体我々は、どちらの方を向いて、走っているのだろうか？我々の意思で、進化の方向性を変えることなど、できないのであるだろうか？

或いは人類の進化が、最初期の、アウストラロピテクスの段階で停止したままだったら、現在の我々はどうなっていただろうか？「サル

惑星」じゃないが、チンパンジーなどに先を越され、もしかしたら、太らして食用家畜にでもされていたか？……。或いは同族のよしみで、奴隷ぐらいには、位置つけられていたか？……。

詮無いことを模索しても、しょうがないが、眠れぬ夜など、人類の過去・現在・未来について、あれやこれやと想を巡らす。そして環境破壊や、目に余る社会秩序の乱れに、人類の進む方向性が、これでよいのかと思案する。もしかして、とんでもない方向を向いて突っ走っているとしたら、取り返しのつかない終末を、早々に迎える可能性も有り得るからだ。

こんな片田舎のただのオヤジが、人類の進化の方向性など、おそれたことを、大声で騒いでみたところで、どうなるものでもない。しかし、人類が万物の霊長などと、己を高位に据えたいのならば、少なくとも、馬や鹿に「なんだ、あいつらのやり方は……」と後ろ指を指されないうつ、威儀を正さねばなるまい。

なぜ私がこんな事を言い出すかというと、これまで人類が歩んできた道筋が、かなり狂気じみているからである。

今まで何度か触れてきたが、一番、目に余るのは人類の「異常繁殖」。どうしてこんな進化のコースを選ばざるを得なかったのか？何も考えずただ成り行きに従っただけなのか？資源や食糧が有ろうが無かるうが、まるで節度なく人口が増え、コントロールがきかない。動物はエサが少なかったら、子供の数を制限するか、生まない方向を選べ。動物の方が遙かに理性的だ。

人口過剰は諸悪の根元。戦のない平穏な時代

など、歴史から探し出すのは至難の業である。

人口が増えれば環境が汚染する。汚染すれば清浄な食糧が生産できない。食糧や資源が逼迫すれば、戦争が起きる。そして増えた人口は、平等に豊かさを求める。豊かになれば、ゴミが沢山出る。地球の許容量を超えたら、月にでもゴミを捨てに行くつもりだろうか。こんな理屈は、小学生でも分かり切ったことだが、どこかの国では、『少子化対策担当大臣』まで設けて、人口を増やそうとしている。年金など目先の対応のためだろうが、百年先・千年先の世界人類の在り方をよく考えているのだろうか？…。

次に目に余るのは、人類の「凶暴性」である。魚類や爬虫類などは、狭いところでエサが不足すると、「共食い」など見られる。しかし哺乳類では最も知能の進んだチンパンジーと人類だけが、仲間同士で殺し合をする。特に人類ではそれが激しい。尊属殺人などあまりにもむごい。なぜこのような方向に進化したのか？知能発達という「山」が高ければ、その反動で、犯罪と言つ「谷」も深いと言つことか？…。

更に目に余ることは、人類の「強欲性」。他の命も資源も根こそぎ奪い取る。加減を知らない。地球の資源は、現在生きている者のみが消費しきつて良いわけがない。未来の子孫達にも平等に受け取る権利がある筈。何を血迷って、根こそぎ略奪を繰り返すのか？物事には全て、バランスというものが重要。再生を可能にするため、来年のため、「根っこ」は残しておくのが、山菜取りの常識であろう。漁業資源、山の動物、鉱物資源みな同じ事。絶滅するまで略奪してきたこれまでの人類の、無思慮な進化の方

向性。この強欲性をなんと解釈したらよいのか？…。救いようのない餓鬼道だ。

アイヌ民族やアメリカ先住民は、「再生」と言う概念を最も重んじ、過剰な略奪は厳しく戒めてきた。物事の道理をしつかりわきまえていた。しかし後から進入してきた弥生人やヨーロッパ人及びその子孫は、物事の加減と言つものを知らない。己の利だけに突つ走る。欲張りの権化となり、徹底的に自然を破壊した。

野生動物で、人類が過剰繁殖したために、絶滅に追いやられた種は数えきれない。マンモス（最大二〇ト）、オオナマケモノ（象の大きさ）、モア（ダチョウの二倍二七〇kg）、ドードーなど、先ず大きな生き物が命を狙われた。更に今、絶滅危惧種は、どれほどあることか。

ここに特記すべきことは、アメリカバイソン（野牛ト）の悲運。北米大陸に入植したヨーロッパ人は、十九世紀初頭には一億頭もいたバイソンを、自分達の食糧にした事は勿論であるが、更に、あるう事が先住民の食糧を断つために、一八八〇年には、わずか数十頭の絶滅寸前まで殺し捲つた。先住民を、人間扱いしない傲慢な侵略者に、腸（はらわた）が煮えくりかえる。凶暴な侵略者共に、どんな反省の言葉があった事やら。そして野蛮な侵略者共も、あわやといつところで、やっと「絶滅」に気が付き、保護に乗り出し、今では三万頭まで回復したという。

更に特記すべきことは、日本が鎖国していた幕末の頃、日本近海には、アメリカの捕鯨船が五〇〇艘も船団を組み、鯨を取り放題。灯明用の油が目的。1853年ペリーが浦賀に来たの

「ふるさと風の会」会員募集中!!

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の、入会をお待ちしております。会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会と月一回の勉強会。入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平 ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

は、外交を結ぶためと言つより、蒸気船の燃料の薪、船員の新鮮な野菜（脚気対策）、水を補給するためであった。最初、幕府はそれを拒否したが、軍艦で脅しにかり、むりやり和親条約を結ばざるを得ない次第となった。大河ドラマ『篤姫』で御記憶の方も多いことであろう。捕鯨に関しては、絶滅寸前に追いこんだ自分達の過去は棚に上げ、今、日本の調査捕鯨さえ、暴力で妨害しているのが現実である。

人類の非行を、数え上げたらキリがないが、環境汚染・自然破壊など。もし人類に叡智と言ふものがあるのならば、いい加減この辺で、目が覚めても良さそうなものだ。大国のエゴイズム、発展途上国の甘えや、わがまま等で、温暖化対策は一体どうなる事やら。温暖化が進めば低地の浸水どころか、熱帯のマラリア・黄熱病などが中緯度でも蔓延。莫大な死者が出る。

オゾンホールが拡大すれば、有害な紫外線などがストリートで地上に届く。すると、細胞のDNAが破壊され、皮膚ガンなど多発。メラノーマ（悪性黒色腫）のガン細胞は転移しやすい。人類だけではなく、全生物の生存が危うくなる。なにしろ、脊椎動物が海から陸に上がるまで、生命誕生以来、三十三億年もかかっている。理由は浅海の植物が吐き出す酸素が、成層圏以高でオゾン層を形成するのに、それだけ時間がかかったと言つこと。それを二十世紀後半のわずか数十年のフロンガス排出などで、命を守るウエールを令、はぎ取るうとしていたのだ。冷房など、今の今、生活しやすければそれでよしとする、人類の一人よがりの進化傾向がなせる愚行である。オゾン層が破壊されれば、遺伝子に

傷が付き、死なずに生きて繁殖すれば、それは子孫に遺伝する。生存に有利な突然変異は極めて希で、大方は不利益に働く。不利益な変異が代を重ねれば、種は絶滅に繋がる。

分かつていても、それを改善実行できないのが、人間の弱さ。英断をふるって世に号令をかければ、今の今が良ければそれでよしとする輩から、猛烈な反発を喰らう。

人類はその醜さと、芸術の発展や、慈悲深い社会構造への憧れとの狭間で、もがき苦しむ姿が、現在進行中の進化の帰結なのであろう。

さて、過去を振り返れば、縄文人は、自然を略奪することなく、天の恵みに感謝し、必要最小限の狩猟採集の、おらかな生活をしていた。それが弥生時代に突入するやいなや、食糧を蓄え始めると、たちまち持てる者と、持てない者との格差が生じ、争いが始まった。腕力が強く、策略を弄し、強欲極まりない者が、『我こそは王なり』と威勢を張つたに違いない。ずる賢い者が生き残る。その進化の方向性が問題だ。

弥生時代・古墳時代・中世・戦国時代と、戦乱に明け暮れ、儒教や仏教が説く、道徳を重んじて万民が平和に暮らす、ユートピアからは、ほど遠い世界となった。

それが近世を迎え、西洋の産業革命のおこほれもいただき、幾らか国力も付いてくると、妄想に駆られ、植民地主義の真似事などして、世界を相手にケンカをふっかけ、見事な敗北。

戦争は懲りごとと、その放棄を高らかに謳いつつも、莫大な軍事費を掲げ、国民の福祉など、北欧諸国の足元にも及ばない。

そして何よりも恥ずかしいことは、経済成長

至上主義。「経済は文化の僕（しもべ）」であるべきはずなのに、いつの間にか王様気取りで、何をおいても先ず経済優先だ。世界の誰が困ろうがオレさえ儲ければそれでよい主義。醜い。文化の成熟こそ一等国の証。今すぐ役立つ、科学技術の研究には多額の予算が付く……等は浅ましい限り。二〇〇八年のノーベル物理学賞は、日本の理論物理学者三名に決まった。物質の本質を解き明かす、地味な「基礎科学」が榮譽を受けた事に、心から拍手を送りたい。

さて、進化の方向性を決める要素は、エサの多少や種類、天敵、気温などが主体であるが、私に言わせれば「進化とは、雌が創るもの」。これは、生物学を生業（なりわい）とする小生にとって、長年の学習から会得したものだ。大方の動物にとって、進む方向性は、雌の好みに従って、選択される。雌はどんなに強くプロポーズされようと、自分の好きなタイプでなければ、なかなか身を任せない。簡単に拒否する。頑強なものよりむしろ、みすぼらしい感じの方を選ぶことさえあるが、大方は力づくで、強い雄は、多くの子孫を残す確率が高くなる。

クジャクやオオソノジカ（絶滅・角幅三メートル）など、生存に不自由なほどに体の一部が発達しようとも、それも雌の好みがなせる技。大きな角を持つ鹿類は、角が絡み合つて身動きできず、そのまま両者凍え死ぬ事さえあるという。クジヤクがあつた巨大な羽根を成長維持するのに、どれだけ大きなエネルギーをロスしている事やら。オシドリは雄はあれほどケバケバしく着飾り、めすの気を引こうとしても、雌は夫を振り切り、他と交わるといふ（鴛鴦夫婦という言葉

は虚飾)。これらことから、進化の方向性は、決して合理的で、合目的とは限らない。雌の浮ついた心が決定権を握ることもあるのだ。

さてそれでは、戦乱の絶えない人類史を省みれば、女性は大々、戦さ好きの荒くれ男を好んで選び続けたというのか。……と強力パンチを喰らいそうだが、原始社会では略奪婚は当たり前。戦国時代など、女性は自分の自由意思で結婚などできるわけもなかった。人類は社会構造が確立すると、個々の意思は無視され、ある方向に突っ走り始めたら、とてもじゃないが歯止めが利かない。連合赤軍の総括、オーム真理教事件。そして大東亜戦争。残虐極まりない歴史だ。この浅ましさも、人間の性(さが)と言うものか。狂人集団を説得できる聖人など、まず、夢のまた夢。人類にだけ設けられた進化論上の特別の「王道」など、有りはしないのだ。

男が悪いのでも、女が悪いのでもない。人類のDNAに刻まれた、悲運の傷痕なのであろう。いずれにしても雌の好み・選択が進化の方向性に大きな影響を与える事は間違いない。

さて生き物にとつて、火山爆発や小惑星衝突、マグマの大噴出などは、まさに空前絶後の大事件である。到底、即座に対応して生き延びることなど至難の業であり、即、絶滅を意味する。古生代以来、過去五億年間に全生物の九〇%以上も絶滅した歴史が、五回も繰り返されている。一方小さな事件なら、例えば、獲物の足が速くなったとか、好物だった果実が苦みを増したとか、小規模変化には、それなりの時間をかけ、変換した遺伝子が、群の中に徐々に定着して、

対応ができ、大方生き残る事ができる。こうして、現在地球上に生き残っている生物は、環境変化をくぐり抜け、子孫を残すことができた。それ故、頑固一徹、自らを変える柔軟性を持たなかった生物種は、粛々としてこの世を去っていったと言える。

悲しいかな進化とは、そのような環境変化に臨機応変の対応ができるか否かにかかっている。比較的大変化の少ない深海で、四億年も殆ど姿を変えずに生き残ったシーラカンスもあれば、化石人類のように、ほんの数万年で、次から次とこの世を去っていった種もある。

『種にも寿命がある』。こんな事は、いくら専門書を漁ってみても、どこにも見つからない。そこで私の仮説……『種としての遺伝子プールも、ある長い期間を過ぎれば、歴代の祖先が積み重ねてきたDNAの配列の疵が、修復できないまでに積もり積もって、新しい世代で初期化しなければ、種の存続ができなくなる』……。こう考えれば、種によって長短はあるが、新種として枝分かれし、活力に満ちた新世代が、種としての命を繋ぎ、古い世代は、粛々とこの世を去っていく理屈がよく分かる。

色々な化石人類が棲息したアフリカで、最後まで生き残っていた「ホモ・エレクトス原人」は、今から三〇万年前、突然、遺伝子変換を起こした。枝分かれした一部は、アフリカを北上し、ヨーロッパへと辿り着いた。この新種は、ネアンデルタール人と呼ばれ、優れた骨格に、現生人類(一四五〇cc)よりも大きな脳(一六〇〇cc)を持ち、死人に花を捧げ、それなりの文化を持ち、二十七万年前、即ち、今から三

万年前まで、ヨーロッパに生存した。

ところが、ホモ・エレクトスは、今から二〇万年前、再び突然変異を起こし、我々現生人類「ホモ・サピエンス」を生み出し、自らはまもなく滅亡した。滅亡寸前の種から、このように元氣な新種が誕生したのである。

新人ホモ・サピエンスの一部は今から七万年前、生まれ故郷アフリカを飛び出し(数百人規模・現生人類の祖先となる)、アラビア半島から北上し、中東で左折し、ヨーロッパに定着(ほぼ四万年前)したのが、コーカソイド(白人)で、右折しアジア大陸の中央部へと進出(ほぼ三万年前)したのが我々の祖先モンゴロイドだ。

【祖先を辿れば、現在の全人類は殆ど血縁同士。隣国同士ほど血縁は近い。しかし、領土争いなど、昔から隣国同士は仲が悪い。哀れなる進化のドラマだ。もしかして、お隣の將軍様は、私やあなたの遠くない親戚かも?……】

一方アラビア半島から、東進し、インドを経て、一部は南方に進路を取り、(ほぼ五万年前)最終オーストラリアまでたどり着いたのがアボリジニである。二〇〇年前、ヨーロッパ人に発見されたときには、いまだ石器時代で狩猟採集の時代であった。

そしてインドから更に東進し、南アジアから東アジアへと歩を進め、その一部は一八〇〇年前の日本列島最古の化石人骨「湊川人」となる。そして、アジアの東端・日本列島には、南方系の縄文人と、シベリアカラフト北海道と渡ってきたマンモスハンターの北方系縄文人とが『遙かなる旅路』のはて、この列島に定

着し、日本の夜明け・縄文時代（一五〇〇〇年前 B C 九〇〇年）が展開する。北方系縄文人の子孫がアイヌ人であり、東部日本の先住民となり、多くの地名にその由来を残す。

さてヨーロッパで終焉を迎えたネアンデルタール人であるが、わずか27万年の短期間で、なぜ種としての寿命を終えたのか？……。後発の我々ホモ・サピエンスより、頑丈な体格で、大脳容積も大きい。それぞれ石器なども、それほど大きな違いはない。そして一方を滅ぼすほどの激しい闘いの証拠もない。さりとて両者が融和し、混血したという証拠もない（ネアンデルタール人の化石からDNA鑑定）。今、色々な仮説が設定され、検証を重ねている。あたかも、種の寿命のようなものが、彼らのDNAにプログラムされていたかのような感じを受ける。

それ故、我々ホモ・サピエンスも、文明こそ極度に発達したが、ネアンデルタールの10万年年下の弟分なので、同じ運命を辿るとすれば、我々サピエンスの残り時間は、計算上、あと7万年ということになる。人類学者は我々の残り時間は、良くてもあと一〇〇万年、環境破壊が進めば、あと一万年がそこそこも言っている。

【「人類が消えた世界」（アラン・ワイズマン 著。早川書房）という本には、現在世界人口は、四日に一〇〇万人ずつ増えている。二〇五〇年には、九〇億人となり、地球の許容量を超過。もし全世界の出産可能な女性が、一人だけしか子を生まなければ（現在は二、六人）、二二〇〇年には一六億人となり、資源・食糧など、安定的な人口となる。】……と述べている。

このように、人口過剰こそが諸悪の根源。以前にも書いたが、人口密度が増せば当然「縄張り」が重なり、そこに血なまぐさい争いが生じる。人類が犯してきた残酷な歴史・アウシユピッツやルワンダの大量虐殺。そして南北両米大陸九〇〇〇万人の先住民を九〇%滅ぼしたヨーロッパ白人の残酷行為。こういう人類の残酷な本能は一体どのようにして培われてきたのか？

アフリカで最も腹を空かしている肉食動物はライオン（狩りの成功率5%）とも言われる。所が同じ類人猿でも先に枝分かれした、オランウータンやゴリラはかなり穏やかだが、最後に別れたチンパンジーは知能も優れているが、残酷で、草食のコロブス（小型の猿）などを八〇%の成功率で狩り、更に、他の群の雄を殺し、雌達を乗っ取る。強い雄を選択する雌達の進化の方向性が、このような結果を生み出したのか。更に人類の欲望は限りなく、贅沢を追求し、自然環境を破壊し、子孫達の安住の地を奪う。温暖化、オゾンホールの拡大等々、いい加減この辺で、全地球的なコントロールを図らなければ、「見るも無惨な惑星」ということになる。

人類に智慧があるのなら、冒頭に述べた疑問を、人類の意思（人口削減策など）で、進化の方向性変換を図るべきではなからうか。人類は偉大な文明を築き、多くの優れた文化を残した。慈悲に満ちた行動も多数見られた。しかし反面、長々述べたように非人道的な恐怖の行為も繰り返した。これが万物の霊長と言えるのかと、眉をひそめざるを得ない方向性も、確かにあった。人類はこれからの心がけ次第で、この惑星は、生

命の揺りかご・ユートピアに近くもなりうる。反面、何の転換も図らなければ、一瞬にして地獄への坂道を駆け落ちる可能性も有り得る。今こそ時の分かれ目と認識し、世界の全人類が叡智を絞って、子孫達の住みやすい環境作りに邁進したいものである。

補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけはいけなのです

医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。

また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。

（石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可）

石岡市石岡 2 1 5 8 6

電話 0 2 9 9 - 2 4 - 3 8 8 1

聖武天皇こと首(おびと)皇子が幼少だったために、思いも寄らず「天皇になれ」と母親から言われた元正天皇が「嫌だ!」と思いつつも「固辞して他の人に押し付けるようなことはせず敢えて自分で国家のために尽くします」と答えた話は「続日本記」などで知られている。

誰でも嫌な仕事はしたくない。今は私利私欲と自分の名譽のためだけに地位を欲しがらる輩が多いから、この女帝の言葉を憲法でも公職選挙法にも入れて置きたいものである。

この天皇は日本書紀を編纂したり律令を改正したりしたが、宮中行事でも「元旦には 歌合戦などという馬鹿騒ぎの番組を見た後遺症で朝寝坊をせず、天皇は午前八時に大極殿に出て公家たちも顔を揃え、新年の挨拶をすべし」というキビシイ慣例を決めた。お屠蘇ぐらいは出たらしいが堅苦しい行事らしく、心仁の乱で中断後に織田信長が復活させている。

正月は、この元旦拜礼に始まり、三が日に鏡餅の前で行われる「歯固め」とか「初子の宴」、そして今では鹿島神宮の神事に残る「白馬の節会(あおつまのせちえ)」、初卯の日に桃・椿・梅・柰などの目出度い樹木の枝で杖を作り献上する「卯杖(うづえ)」、枕草子にも記録された「望粥の節供(もちがゆのせつく)」その他の行事がある。

伝統と言えは聞こえは良いが半ばはコジツケのような宮中行事が延々と続く一月が過ぎて、二月は初午、現代の節句に当る祈年祭(としごいのまつり)、そして二月は雛祭、曲水の宴などがあるほか、大原野・春日・賀茂の諸神社祭礼と、飢え

や貧乏に苦しむ庶民とは別世界に居る公家たちの非生産的で無駄な春は忙しい。

その日、寛弘五年(1008)三月中頃の穏やかな或る日、広大な屋敷の一角に設けられた仮御所(一条院)の後宮から政庁に抜ける廊下の中程で少しずつ色を増す庭の木々を眺めながら一息ついていたのは、飛ぶ鳥を落とす勢いを誇示する左大臣の藤原道長である。

三年前の寛弘二年十一月十五日に御所は火災に遭い、天皇一家は道長が保有する東三条殿に緊急避難していた。翌年の春には新内裏再建のメドが立ったので、道長は東三条殿より広い自分の屋敷内にある一条院殿舎に天皇一家を遷らせ仮の内裏としていた。

実は七年前の長保三年(1001)十一月十八日にも御所の火災があり、その時に仮御所として道長が建てさせたのが一条院である。仮御所が役立つて良かったなどと喜んではいられない。寛弘二年の火災では三種の神器のうち、神鏡と呼ばれた「八咫(やた)の鏡」を完全に焼失してしまったのである。

既に「ふるさと 風」をご覧頂いている皆様には第二十二号「神器と大仏」でも内裏焼失を紹介したが、あの時の火災では村上天皇が灰の中から焼けた鏡を発見した。サンドペーパーで磨いて何とか誤魔化して皇居内に置いたものを、ご丁寧にも二度焼きしたので今度は完全に溶解して銅の固まりになった。

「八咫の鏡」は伊勢神宮のご神体であるから、焼けたものとの関係が気になるが「ドウでもよい!」と開き直ったのか、藤原道長は神鏡焼失を気にしていた様子が無い。実は神鏡が伊勢神宮に

祀られたのは比較的早い時代であったようであり内裏に置かれたのは最初からレプリカ?それならば、村上天皇も天徳四年の火災時に火傷覚悟で探さなくてもよかつたのに:

「一の上(かみ)!」背後に声がした。左大臣の上には名譽職のような関白や太政大臣があるのだが、この時には置かれていなかったから左大臣の藤原道長が最高位になる。一の上とはナンバーワンへの敬称である。道長は無言で振り返った。天皇に次ぐ権威と権力とを持つ自分に対して背後から声をかける人物は、そうやたらに居るものではない。

「ああ、式部殿が…」

不機嫌な表情で振り向いたのを慌てて隠すように道長は作り笑いをした。

「ご無礼を致しました。お許し下さい」

紫式部はつと正面に回り、袴の裾を払ってから道長の前に平伏した。

「如何なされた…」

「中宮(ちゆうぐう)様の機嫌は、お宜しかつたでしょうか…」

式部は気まずさを誤魔化すように気を使う自分を意識しながら、分かり切った質問を投げ掛けて、相手の返事を待たずに言葉を続けた。

「…お話し申し上げたことがございまして…

櫻の献上の儀でございますが…」

「櫻がどう致したとな?」

「中宮様は仰せになられませんでしたか…実は興福寺から使者が参りまして、今年は例年に無く八重櫻が沢山に蕾を付けておる由にございます。これは内裏の瑞祥に違い無いと人々が噂を申しているとか…」

式部は一息ついて道長の顔を仰ぎ見るように大きく面を上げた。道長は面映いように式部を見ている。晩婚ながら一女を産み、すぐに夫に先立たれた中年女性の色香を知性で隠した式部に道長は敬意のような恋慕の情を持っていた。

紫式部を中宮に出仕させたのは、道長の正室・源倫子（みなものりんし）である。この女性はこの菅原道真を登用した宇多天皇の曾孫であり、本来なら皇后にも冊立（さくりつ）勅命により推挙されるのだが、運悪く（時代が悪く）結婚相手になる天皇も皇太子も居なかった。

そこに目を付けたのが、未だ新人時代の道長である。厚かましく結婚を申し込んだら「身分が違う！」と一喝されたのだが、倫子さんの母親が「売れ残っても困るから」と許してくれたとか、道長も奥さんには頭が上がらないから、紫式部を公然と口説く訳にもいかない。

しかし「源氏物語」の主人公「光源氏」のモデルを藤原道長だとする説や紫式部愛人説などもあるから、現代流に言えば二人は「お付き合い」の関係だったことも推測されるのである。

序でに触れて置くと紫式部が乞われて一族の藤原宣孝の妻となり生まれた女兒は藤原賢子（ふじわらのたかこ）である。道長の甥（兼隆）と結婚したが離婚、大宰府の次官（大貳）と再婚して、自分は後冷泉天皇の乳母になり従三位を買ったから「大貳三位（だいにのさんみ）」と呼ばれた。紫式部とは十六歳で死別、一人で生きて水戸黄門と同じ地位に出世したのである。

話を戻すと、源氏物語で男女のことをシツコク書いたのだから、紫式部も道長が自分を見る眼が「左大臣」ではなくなっていることに気付いてお

り、二人の間には何とも言えない、他人には嫌らしく感じるような微妙な雰囲気がある。式部は自分の感情を振り払うように言葉を続けた。

「興福寺では、折しも中宮様ご懐妊の慶事を伺いましたとか、お慶びの先触れとして観頃の八重櫻を中宮様に献上することが叶わぬか、問い合わせて参りました次第にございます」

「ほほう、八重櫻とは目出度い。中宮も喜ばれるであろう。奥向きの支障が無ければ申し出の通りに致して差し支えないとは思いますが、委細は式部殿にお任せするとして…」

道長は言葉を切って、何事かに気付いたように式部にぐつと近づき声を落として言った。式部は源氏物語の中で、自分が書いたような場面に慌てながらも、身近に感じる異性に悪い気はしていなかったが道長は現実的なことを言った。

「興福寺は我が藤原一族の氏寺ゆえ応対には格別の扱いが必要じゃ…それだけでなくも近頃は興福寺の勢いが盛んになって、役人も手を焼くという噂もある。其の辺りを考えねばなるまいかのう…当日はお布施のほかに中宮のお言葉かご返歌を与えて、桜の取り入れには式部殿の歌ぐらいを添え

ことば座文庫

ことば座・ギター文化館発「常世の国の恋物語百」の朗読舞の脚本が、文庫本になりました。ギター文化館、いしおか補聴器にて発売しております。

（朗読舞劇脚本）

- 1 - 「恋瀬川物語」 (500円)
- 2 - 「古里は春の夢」(一人は二人、そして二人は一人) (500円)
- 3 - 「新鈴が池物語」 (500円)
- 4 - 「奴賀比売物語」 (500円)
- 5 - 「風貴」(龍を愛したまほろばの里の娘) (500円)
- 6 - 「漆黒と雑木林と星たち」 (400円)
- 7 - 「風に戯れて恋歌の呟いて・06年」 (400円)
- 8 - 「万葉集・ひたち恋歌」 (300円)
- 9 - 「新説柏原池物語」 (400円)
- 10 - 「里の舞い歌」 (300円)
- 11 - 「緋桜怨節」(菖蒲沢薬師堂弁天池秘聞) (500円)
- 12 - 「鳴滝にて」 (500円)
- 13 - 「馬滝」(のっぺらぼうの涙) (500円)
- 14 - 「風の姿」 (500円)
- 15 - 「悪路狼夢(オロロム)の歌」 (500円)
- 16 - 「新鈴が池物語(2008)」 (500円)

ギター文化館 電話 0299 - 46 - 2457
いしおか補聴器 電話 0299 - 24 - 3881
ことば座

ねばならぬであろう。しかし中宮にご返歌をお願
いできるであろうか？」

道長の思案する様子を、式部は予測していたよ
うに見ている。面倒な春の行事が終った後で懐妊
が分かった中宮に、これ以上の気遣いをさせたく
ない親心を察していた。

「中宮」とは道長の長女・藤原彰子（ふじわら
のしようし）である。十二才の時に一条天皇の女
御（にょい）第一側室（よこむすめ）として入内した。（正しく
は道長が強引に入内させた）やがて一条天皇との
間に後一条、後朱雀の両天皇を生むのだが、長保
二年に他界した藤原定子（ふじわらのていし）が
既に皇后に立っていて皇太子要員の敦康（あつや
す）親王が生まれていた。

その関係で彰子は、第二皇后に当り皇后の別名
もある「中宮」と呼ばれるのだが、野望の塊のよ
うな道長は彰子中宮に皇子さえ生まれれば、出生
の順番を変えて孫を皇位に就けるぐらには簡単で
あり、それを祈っていて事実、そのようにした。

定子皇后は道長の長兄・藤原道隆の娘、つまり
道長の姪であるが、出世のためには親子兄弟も食
い合い潰し合った時代のこと、定子皇后の死と、
それに先立つ道隆一家の没落・当主の早死は道長
に幸運を齎すことになった。

絶好のチャンスを生かすには彰子中宮に皇太
子となる男子が生まれることである。道長は焦っ
ていた。今は「掌中の珠」とも言うべき中宮には、
面倒なことをさせずにおきたい。

「そのことでございませうが…」
式部は少し下がって座り直すようにしてから頭
を下げたままで言った。

「私も、中宮様にご返歌のことなどでご負担を

お掛けしてはなるまいと存じまして、真に僭越で
はございますが、代詠では如何かと…そのことを
お伺い致したく、人目を憚りまして申し上げた次
第にございませう」

道長は心中に「さすが、式部殿！」と叫びたい
ところを態度に表さず、わざと空など見上げてか
ら少し不服そうな口調で訊ねた。

「それはよかるうが…中宮の代詠となると式部
殿、そなたしか居るまい…そのことは勿論、異存
無いのだが…そうなる肝心の取り入れ役が居な
くなるのではないか、この大役をこなす者を如何
になさるお考えか？」

たかが奈良の坊さんが担いでくる八重櫻の束を
受け取るだけのことで、仲居さんでも婆やさんで
も腕っ節が強ければよさそうなものだが、何事も
大げさに格好つける宮廷儀式では大騒ぎになる。
ましてや、藤原氏菩提寺で格式のある興福寺から
皇后宛に献上となると、肩書の有る僧侶が大勢の
供を連れてやってくるに違いない。

興福寺は藤原氏の始祖・鎌足の遺志を継ぐ不比
等（ふひと）創建の法相宗（ほつそうしゅう）大
本山であり、国分尼寺を建てさせた光明皇后も五
重塔や金堂などを建立寄進している。藤原氏の繁
栄と共に隆盛となり、伊勢（皇室）に次ぎ、石清
水八幡（武家幕府）と並び、「三社の格式」を持つ
春日大社（公家）を鎮守として支配していた。興
福寺が持つ荘園は大和一国（奈良県全域）に及ぶ
大勢力であった。

「興福寺でも中宮様のご体調をご案じ申し上げ
ております。僭越ではございますが、中宮様の代
詠は私が勤めさせて頂き、万事相相の無きように
取り計らいまするが…」

ここで言葉を切って、式部は少し間を置いた。
既に自分の一存で事を進めかけてはいるのだが、
相手は時の天皇さえも替えることの出来る人物で
ある。「想われる女」を武器にして、片目を瞑りニ
ツコリ笑って承知させる訳にもいかない。

「…実は、私の代わりを致させるに叶う者を探
し出してあります…ご足労をおかけしますが一の
上には、その座までお出まし願わしゅう存じ上
げまする」

式部は廊下から見える部屋を指して言った。
時代劇のセットで江戸城内の部屋の多さを垣
間見ることが出来るのだが、基本的には御所を模
したものであるから、そこから御所の規模も推
測できる。天皇の居る「内裏（だいり）」を中心
に所轄官庁の建物が配置された平面図は、国語の参
考書や歴史書に飽きるほど載っている。

紫式部が藤原道長に来て欲しいと言ったのは内
裏の中でも、天皇の御座所・紫宸殿（ししんでん）
の北側にある常寧殿（じょうねいでん）、弘徽殿（こ
きでん）、貞観殿（じょうくんでん）などのいわゆ
る後宮に属する建物の一角である。ただしこの時
は正規の御所ではなく一条院の仮御所であるから間
取りも少なかった。どこか空いていた部屋の一つ
を使ったのである。

道長は好奇心もあって式部に言われるままに程
近い一室に赴いた。先導の女官が障子を開けると
十人ほどの女たちが平伏していた。式部は道長を
上座に案内すると、屏風の陰に控えていた下級官
女に目配せをした。横の襖（ふすま）が開き面長
な顔立ちの女房が現れて式部の後ろに控えた。

後宮と呼ばれた宮中の奥向（江戸時代の大奥）
に仕える女性たちは原則的に国家公務員の官女で

あった。平安時代からの特徴として天皇の后妃が皇后、中宮、女御（にょご）、更衣（こうい）さらに御息所（みやすどころ）、御匣殿（みくしげど）の（尚侍（ないし）の（かみ）、典侍（ないし）の（すけ）、掌侍（ないし）の（しょう）などに多様化すると、それぞれの家元などから付けられた女房が登場してくる。

ほかに采女（うねめ）と言って地方から召集された愛人要員が置かれたから、巡回する天皇も疲れるが回りの者も大変であった。何よりも莫大な金がかかる。実に呆れた制度であった。

采女は天皇の眼に留れば后妃に格上げされる。その上に女房は私設秘書みたいなもので、中には正式に任官されている者があり、区別が難しい上に皇后などの側近だから正式な公務員の官女よりも鼻息が荒い。後宮はキャリアのエリートが威張る現代とは違っていたらしい。

紫式部こと藤原為時の娘も本名は香子（たかこ）と言ったらしいのだが、父親が式部丞（しきぶのじょう 宮内省局長級・正六位相当官）であったため「藤の花」紫・式部丞「式部」を名乗ったとされる。人気女流作家として知られた上に権力者である藤原道長の夫人が、中宮の家庭教師として付けた女房なので権威は女官も及ばない。

道長は式部の後ろに控えた女房の横顔に見覚えがあるような気がしたのだが思い出せずにいた。式部は控えた女房を指し示した。

「この者にござります。中宮様にお伝え申し上げておりますが、未だ一の上には御意を得ませず私の許にてご奉公を見習っております。」

式部は、敢えて名前を言わなかった。
「式部殿のお言葉だが、取り入れ（献上物の受

け取り儀式）役は大役なるぞ、未だ日の浅き者に勤まると思えぬが、何より、取り入れの歌が粗略であつては後宮の恥になる。その者は歌の道に通じておるのか…」

道長の言葉が終らぬうちに、式部が扇を取り出してサツと開いた。すると平伏していた女房が顔を上げ、席を空けた式部の横に座を移すと玉のよな声で一首の歌を朗詠した。

「いにしへの奈良の都の八重櫻けふ九重に匂ひぬるかな」

言うまでも無く百人一首六十一番に収録された名歌である。女房はもう一度涼しげに詠んでから一歩下がって平伏した。

百人一首が出たついでに紫式部母娘は五十七、五十八と続いて作品が載っているので、歌人としても知られた証拠に触れておく。

紫式部

「めぐりあひて見しやそれとも分かぬまに雲かくれにし夜半の月かな」

大式三位

「有馬山いなな笹原風ふけばいでそよ人を忘れやはする」

さて紫式部が推薦する女房の歌であるが「てにをは」を抜いた名詞だけの芭蕉の名句「奈良七重七堂伽藍八重櫻」は、その名歌を念頭にしている。「奈良の都の七堂伽藍」「八重櫻献上」「九重「宮中の慶事」と重ねて中宮の懐妊を寿ぐ歌の意味を、さすがに解した道長は、新人と紹介された女房の歌の力量に感服して、思わず感嘆の声を上げたのである。

「大中臣輔親（おおなかとみすけちか）の娘にて伊勢大輔（いせのおおすけ）にござりまする。」

「挨拶が遅れておりますが、先ごろより中宮様のお声がかりにてご奉公を致しております」

式部は、すかさず紹介をした。大中臣氏とは、遙か神話の世界に天照大神と共に登場する天兒屋根命（あめのこやねのみこと）の直系氏族で占いを所掌する卜部（うらべ）氏に属し、伊勢神宮の神官を勤めて全国の神職を統括する神祇伯（じんぎはく）に任命される家系である。

この一族は特に和歌を良くする人材が多く、伊勢大輔を中心とした父祖子孫は、七代に亘って後拾遺集などの歌人である。大輔は「たいふ」とも呼び宮中の政務を扱う中務（なかつかさ）省の次官級の呼称である。大中臣一族が任命されていた神祇伯が律令制で中務省に包含され、大輔の地位が与えられたのであろうか。

「おお！そうであったか！思い出しました。さすがに姉君に似ておわす。輔親殿の娘御で有られたか！式部殿はお目が高い！この歌ならば当日の取り入れ役に見劣りはせぬ。後は式部殿に中宮の代詠をお任せすれば万事宜しい。中宮も安んじておられる。良かった。良かった…」

道長は上機嫌であった。実は伊勢大輔の姉が、定子皇后の兄・藤原伊周（これちか）に嫁いで一男二女を儲けているのだが、一夫多妻の時代なので縁も薄い。さらに伊周の父・道隆が弟の道長と権力争いの最中に早死にし、跡継ぎの伊周はある事件で失脚して、この年の正月に道長に全面降伏をする形で復権が許されたばかりである。

全てを承知していた式部は、言わば敗者の縁に連なる立場の伊勢大輔を、敵将の前でデビューさせる機会を狙っていたのである。

幾日か暖かな日が続き、やがて興福寺から八重

櫻が献上される日が来た。中宮の懐妊祝いであるから、大僧正が自ら一条院にやって来た。派手な袈裟を纏ったお供の僧たちが従い、作業員の僧が数名で八重櫻の枝を抱えている。成る程、咲きかけた花も蕾もふっくらと見事である。

仮御所では正面に一条天皇と彰子中宮が着座し左右と後方には、薨の数ほどの公家や女房どもが無駄に居並んでいる。大僧正が尤もらしく天皇と中宮にお祝いを言上し、坊さんのリレーで台座に櫻の枝が置かれた。

一条天皇も、心中では「毛虫が居るのではないか？」と心配しながらも「目出度い！」とか何とか声をかける。中宮の近くに平伏していた伊勢の大輔が、膝行して櫻の台座を天皇と中宮との間に近づけ、一礼して立ち上がると、扇を開いて顔を隠すように「いにしえの…」と例の和歌を臆せずに二度朗詠した。

一条天皇、彰子中宮を始め列座の一同は紫式部が自分の役を譲ったという新人の所作に注目していたが、歌の出来栄えといい献上の櫻を受け取る仕儀に些かの隙も無く、その優雅で気品ある立ち居振る舞いに感服したのである。

伊勢大輔が退くと、中宮のすぐ傍らに侍していた式部が、天皇と中宮に一礼してから興福寺の大僧正の前に進み出て中宮の返歌を掲げ示した。

「九重に匂ふを見れば櫻狩重ねて来たる春の盛りか」

代詠者の紫式部によって静かに二度、詠じられたこの歌が、彰子中宮の作か式部の作か異論の多いところであるが、前後の事情から式部説が強いようであり「続後拾遺集」に式部の名で選録されているといわれる。

中宮返歌も取り入れの歌に劣らぬ見事なもので一同感服、この儀式は滞り無く済んだ。さすがの道長も安心大満足で、紫式部と伊勢大輔は天皇からも芳いの言葉を賜った。

興福寺には二首の色紙に添えて砂金と綾衣の束が贈られた。この綾衣は常陸国から収められた税であり筑波山麓（小幡）で織られたものである。

元手の要らない櫻の枝で、多大の収穫を得た興福寺の坊さんたちは笑顔で奈良へ帰って行った。それ以来、奈良の寺では八重櫻を植えるのが流行したかどうかは知らない。

庶民には何の意味も無いこの無駄な出来事が公家社会では忽ち評判になった。紫式部は既に「源氏物語」の一部を執筆していて、書店にも本が並んでいたから都中に名を知られていたが、新人ながら大役を果たした伊勢大輔も有名になった。

「姉のこともあり、一の上様にお目見えする」とは叶わぬ夢と諦めておりましたのに、新参の身にて、大役まで努めさせて頂き忝く存じます。式部様のご厚情忘れませぬ」

「大輔殿のお力です。道長様もご満足、何よりも中宮様がお慶びで私も安心致しました」

無事に儀式が済んで一同が退席した座敷に二人残った式部と大輔は大役を果たした喜びをいつまでも分かち合っていた。平安時代に生きたこの二人の才媛は、先輩後輩の立場を越えて共に文学を志す女性として深い交際を持っていた。

当人同士は、単に気心の合う同性としか意識して居なかったようであるが、実は運命的な深い因縁で繋がっていた。勿論、そのことは後世の歴史が立証しているだけで、その当時の式部も大輔も知るすべが無い。

平安時代には、選ばれた多くの女性が後宮に集まり、独特のサロンを形勢していた。そこに紫式部らが登場するのは「平安中期」である。皇后の定子（ていし）に仕えた清少納言が唐の詩人「白楽天」の詩「香爐峰（こうろほう）の雪」に因んで一条天皇の御座の簾（すだれ）を巻き上げて雪景色を見せた話は有名である。

定子皇后は藤原北家・師輔流惣領の道隆と高階貴子（たかしなぎし）との間に生まれ、幼時から皇后要員として理知的だが温和にと育てられた。高階貴子も、出征兵士のような歌の百人一首歌人（儀同三司母 ぎどうさんしのは）である。

「忘れじの行末まではかたけれど今日を限りの命ともがな」

「儀同三司」とは「大臣に準ずる」と言う意味で伊勢大輔の姉が嫁いだ藤原伊周のことである。罪を得て大臣失格になったが、後に準ずる扱いを受けた。定子皇后の兄に当る。

清少納言と紫式部はライバルのように見られているが、二人が出仕していた時期は微妙にずれている。交流があったのかどうか…

彰子中宮は静かな定子皇后とは対称的に明るく気立てが良く、人情味もあるお嬢さんだったようで父親の藤原道長が良く言われないから娘も損をしているようなところがある。後に、父親の政治手法に反発し、それが紫式部の運命に影響することになったと私は思っている。

寛弘五年、つまり八重櫻騒ぎのあった年の九月十一日に彰子中宮は男児を出産した。一条天皇の第二皇子である敦成（あつひら）親王で、九歳にして即位し第六十八代の後一条天皇となるのだが何と次の皇太子が二十三歳だった。

これは藤原道長が思うように皇位を決めていた影響であり、続編で書くが、つまるところ二十三歳の皇太子は自発的にリタイアした。最初に紹介した元正天皇のように「固辞せず敢えて自分で」などと言っていたら消されるからである。

彰子中宮の産屋は、土御門邸と呼ばれた実家の一室に設けられていた。紫式部や伊勢大輔など女房から女官から、大勢の者が一条院から移り住んで中宮の産に備えていた。ところが産が重くさすがに道長も気の動転するほどに慌てふためいていた。政務も手につかず、しばしば式部を呼び出しては「式部殿、如何であるつか？」と聞くのだが、こればかりはどうなるものでもない。

「お上がどうこう仰せられても女子のお産はまつりごとのように片付くものでは御座りませぬ。中宮様も元氣なお子を産み奉ろうと堪えてお出でなのです。必ずや無事に出生遊ばしますから落ち着いて吉報をお待ち下さりませ…」

式部は邪険に道長をたしなめるしかない。道長は落ち着き払った式部の様子に、少しばかり安堵はするものの、とても政庁には出仕できずに屋敷に集めた五十人と八十人も伝えられる祈禱の僧たちを怒鳴り、盛んに護摩を焚かせ祈らせた。

その煙と喧しい読経の音が微かに産所へも洩れてくるから、目出度いお産なのに火事だか葬式なのだか分からない雰囲気の中で、どうやら無事に産が済んだ。やがて八重櫻の効き目が有ったかどうか中宮「安産」の知らせが道長に届いた。

道長にすれば「安産」の知らせよりも、生まれたのが「皇子か皇女か」を聞きたいのだが正規の使者は順を追って先ず天皇に報告してから、悠長にやって来るからどうかしい。

「親王様ご誕生にござります。ご母子共にご健全にて執着至極に存じ上げます。」

落ち着いてはいるが、声の調子が上ずった式部の報告を聞いて、道長は権力の階段をまた一つ上がった充実感に浸っていた。

藤原道長の腹黒い満足感もさることながら一条天皇も人の子であるから、男児の出生を喜び彰子中宮の母、つまり敦成親王の外祖母になる倫子に従一位の位を授けた。本来は外祖父の道長に昇進か贈位か叙爵が行われるのが筋であり、左大臣から太政大臣か関白に任命されるところなのだが、道長は既に、関白太政大臣と同じく天皇に接する「内覧」の宣言を受けていたので、代わりに正室の倫子に叙位が行われた。

倫子は道長との間に二男、四女を生んだ。そのいずれもが要職につき、又は天皇家と密接な繋がりを持って道長の権力保持に貢献している。

敦成親王が誕生してから五十日目に当たる寛弘五年十一月一日には盛大な祝賀の宴が開かれた。酔った道長は彰子中宮を自慢し、やがてその自慢は道長自身の自慢話に替わっていた。

宮中全体が浮かれた雰囲気でも寛弘五年が暮れようとしていたが、藤原一族の権勢も其の頃が頂点であり、徐々に衰退の兆しが現れてくる。

十二単に身を飾った紫式部たちに、箒や雑巾を持つての大掃除など出来る訳は無いが、意味の無い師走の慌しさだけは宮中も同じで、女房や女官たちも人並みに走り回って大晦日の夜を迎えた。元旦は、冒頭に述べた元正天皇以来の行事があるから寝坊も出来ない。

「大輔殿、ご自分の衣裳をお調べなされませ」
唐突に、大晦日の間の中から声かして手燭をか

ざした紫式部が伊勢大輔の部屋にやって来た。

「…衣裳でございますか？」

怪訝な顔で伊勢大輔が顔を見せた。夜も更けている。

「内裏に盗賊が忍び込んで、女官たちの衣服が盗まれたそうですよ。盗られていませんか？」

「私は、ずっと此処におりましたし、特に…」
「それならば結構…」

式部は辺りを見回したが、大輔付きの女官も既にさがっている。式部が大輔の前に座り直したので大輔は式部の手燭を借りて、自分の部屋の灯を灯してから、自分も姿勢を改めた。

「少し、お話ししておきたいことがあります」
「何でございましょうか？」

「大輔殿は勿論、伊周様のご一家に起こった悲劇はご存知でしょうから、今は亡き定子皇后がお生みになられた敦康親王の現在のお立場もお聞き及びですね…」

大輔は式部の言葉が今宵の盗賊騒ぎと、どのようにつながりのか理解できずに、ありきたりな返事しか出来なかった。

「はい！皇后様のお父君は未だ四十代で身罷られ(みまかられ 死去)、その翌年には伊周様が事件を起こされて、さらにお屋敷が火事で無くなり、ご母堂様もご心労の余りお亡くなりになられて…誠に皇后様はお気の毒と申し上げるほかは御座いません…」

「悲劇の中で皇后が亡くなられたのは八年前のことです…」

「存じ上げております…たしか、その年には式部様も山城守様を…」

大輔は、触れてはいけないかと躊躇って言葉を

濁した。山城守とは紫式部の亡き夫で越前守なども歴任した藤原宣孝のことである。式部とは年齢の離れた再従兄弟同士でもあり、互いに見知った間柄であった。度々の求婚に応じなかった式部は二十七歳の春に嫁ぎ数年で死別している。黙って頷いた式部は、大輔の発言を無視するようにさらに言葉が続けた。

「定子皇后は帝のご寵愛も深く、敦康親王は聡明であられるから、ご実家の不幸さえ無ければ次の帝になられるお方です。しかし今は皇太子の話さえ無い…この度の敦成親王ご誕生で敦康親王の登位は先ず無いでしょう…」

式部は自分に言い聞かせるように呟いた。人格識見ともに天皇に相応しいと言われた一条天皇第一皇子の敦康（あつやす）親王は、天皇どころか皇太子にも推されず、紫式部の娘・賢子よりも低い官職のまま、二十歳の若さで淋しく世を去った記録だけが残るのみである。

「…中宮様にお仕えする私たちは恵まれた立場に居ります。大輔殿も姉君のごことで辛く悔しい思いをされたのでお分かりでしょうが、不遇のまま亡くなられた方々の怨念やご不幸な系統の人たちの羨望と嫉妬が有ることを忘れてはいけません…定子皇后のご母堂・貴子（きし）様は従二位で大学頭（だいがくのかみ 現在の東大学長）をされた成忠殿のご息女ですから、学問はお出来になりその上に女子の私なども惚れ惚れとするような美しいお方でした…」

「私も一度だけお目にかかったことはあるのですが、何分にも子供頃の頃で…」
伊勢大輔は、姉の姑でもあり、また学者の家柄である高階貴子の一族が自分の実家・大中臣家も

似た様な環境なので、藤原道隆・伊周父子の没落による高階家の衰退が身に沁みていたのだが…今は声に出しては言えない。

それにしても紫式部が、なぜ、愚痴めいた話をするのか、盗賊騒ぎとどのように結びつくのか、大輔には全く分からない。灯火に照らされた大輔の顔に疑問を察知したのか、子どもに諭すように式部が一層、声を落して言った。

「…今宵の盗賊騒ぎにしても、まさか宮中に賊は入るまい！と誰もが思っている。でも奈良に都が在った頃には、帝のご衣裳が盗まれたこともあるのですよ。その時の帝は恐怖で不眠症になられたとか…今宵は女官が被害にあった程度らしいのですが、それでも盗賊が御殿に忍び込んだことは事実です。そして、これが何者かが仕掛けた嫌がらせかも知れないのです…」

ここで式部は言葉は切って、過去を思いだすように口調を改めた。

「…私は母を早く亡くしましたから、父と弟の面倒を見なければ、という思いで結婚が遅れたのかも知れませんが…結婚後は僅かな間で夫を亡くし何事にも気弱になり、全てのご嫌になつてきたのです…立ち直ることが出来たのは『このままで良いのだろうか？』という自分への疑問から源氏物語を書き始めたことです…筆を持ち、人間の生き方を表現する…生意気なようですが、そのことで自分自身の生き方も振り返ることが出来るように思うのですよ…源氏物語は未完成ですが、もう少しで終らせる心算です。物語の中には五百人以上の男女を登場させます。重要な人物だけでも八十人以上になりそうです。私たちが今、居る華やかな宮中が舞台ですから、人間の数と共に、花

のように賑やかそうな話しに思われてしまいます。しかし私の本心は単なる浮ついた物語にしたくはないのです。常日頃、私が感じている何か分らないが『無常観』『不安感』を底に持つ作品に仕上げたいと思っているのですが…大輔殿、もし私がこの世を去つての後に『源氏物語』について、とやかく言う人が出てきたならば、どうか私の本意が伝わるように弁解をしてあげて下さいませんか…そのことが常に気懸りなのですが…今宵は、幸いにも…と言うのも変ですが、盗賊騒ぎが有りまして、信頼の出来る大輔殿に、そのことだけをお願い申し上げたくてお邪魔を致しました…」

式部はサツと立ち上がり、自分の手燭に火を点すと、大輔が何か言いたいと思う僅かな時間に部屋を出て廊下の間に消えた。

紫式部は、この時の年齢が三十代の中頃と推定されている。世界的な大作「源氏物語」を完成させて四十二歳で世を去つたとする定説に従えば、もう時間が無い。

伊勢大輔は紫式部が去つた奥のほうをじつと見送りながら、言われた言葉の一つ一つを思い出し噛み締めるようにしていた。式部の真意を完全に理解した訳ではないが…深夜の間は寒気を伴って板戸の隙間から部屋に入ってくる。大輔は灯りを吹き消し夜具を被つて横になった。

時は過ぎて既に寛弘六年の元旦になっていた。新しい宮廷行事が始まるので、式部も大輔も一眠りしたら早起させねばならない。この年には正月早々から大輔の義兄（伊周）を巻き込む怪事件が起こり、また十月には御所の火災で重要な記録を失うことになるのだが、紫式部も伊勢大輔も知る

工房オカリナアートJOY

母なる大地の声を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で...、大好きな雑木林に一掴みの土を分けていただき、自分の風をふるさとの風景に唄ってみませんか。

オカリナの製作:演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465 0299-55-4411

すべは無く、己酉年の行事の面倒な手順を思い浮かべながら、いつしか短い時間の深い眠りに落ちていったのである。

編集ミスにより才媛の時代(二)が、(一)に先行して十一月号に掲載してしまいました。
読者の皆様にはご迷惑をおかけいたしましたこと、お詫び申し上げます。

『一行文』

世界でいちばん小さな物語

白井啓治

俳句とは、一行に書く「長編小説」と理解してもいいだろう。芭蕉や山頭火などの俳句を読んでいると、「五・七・五」という十七文字に実に壮大な長編小説の世界を紡ぎこんでいるように感じられる。もっとも山頭火の場合は、十七文字にとらわれない自由律の俳句ではある。しかし、壮大な長編小説であることには変わりない。

俳句が長編小説であれば、我等が一行文は、世界でいちばん小さな物語であると考える。

日常に誰もが思い、感じている何気ない、でもちよつと捨てがたい生活感情という物語を、メモに書いてポケットに仕舞い込む。忘れてそのまま洗濯をして、ある時それに気付いて、パリパリに固まった紙切れをそりそりりと広げてみる。そして、そうそう、あの時嬉しかったんだ、ちよつぱり悲しかったんだ、なんて思いだして懐かしむ。一行文。それは自分だけの、自分の為に書かれた世界一小さな物語です。

白井啓治

- ・風がちよつと立ちどまってやぶの中
- ・雑木林をひとりとはほ風もとほとほ
- ・わかれ道 さてどつち行く
- ・この恋を月も笑って見てござる
- ・紫陽花も恋に狂って七変化
- ・月はおぼろに笑ってござる
- ・枕あかりに月を灯したら蚊に喰われた
- ・オクラの花に秋の風が腰かけた

コスモスの花

もう終わりにしようかと迷っている

あばら家は今夜も賑やか

蟋蟀の音が金木犀の香を連れてこざった
春の生命の埋めて今年の滅ぶ秋

有村政子

咲く花のような気分です

つゆ草に感激している私が好き

そんなに引く張るな

私が散歩させられているよつだよ

低い雲が急いで 私も急いで

秋が山盛り

夜つゆ朝つゆが朝日と遊ぶ

私の影でとまった

今日のランチはオカリナとおにぎりです

時間のレールに乗せられてここにいます

大津礼子

麦畑色づきて夕焼けに冴えて

清々と 鶯 雉が鳴く

ひと汗かいて風をつけ

ながい影絵と遊ぶ下り坂

午睡する横で猫ものびている暑い午後

ゴーヤのカーテン 陽が射して畳の中で

葉っぱが揺れている夕立の後

風に吹かれたクモの巣に

ピンクの花びら舞いおりて

木枯らし吹いてネコとこたつ

銀杏の葉っぱ 黄ら黄ら どこまでも

伊東弓子

・ 煉瓦塀に顔を出すバラ一輪

・ 夕陽がいつたあの山の向こうにまた山があり

・ 繋がれた犬の痩せた姿に暑さ

・ 草の波

涼しげにコンクリートの道に影をおいて

・ あじさいの大輪 陽ざしに重くたれて

・ 路地の石畳に綿毛とんでいく

・ 十字架の輝きはどの町にもあり

・ 十字架の高く 正の瓦おちて久し

次の会報に、一行文を載せようと思います。そう言つて、原稿の締め切りまでに届いた文は三名だけであった。ちよつとさみしい思いであつたが、それぞれに素晴らしい物語が書かれてあつて、とても嬉しい気持ちにさせられた。

有村さんの「秋が山盛り」は、余分な説明や形容をやめて寸でのごとくで標語にならず物語を語つています。また「時間のレールに乗せられてここにいます」は、心の裡を透かして見るような小さな物語になつています

大津さんの「ひと汗かいて風をうけ、ながい影絵と遊ぶ下り坂」は、映画のような物語になつていて、自分もその世界にいるような気持ちにさせられます。

私たちは、毎日、浮遊する塵ほどの、よく目を凝らしていないと気付けないほどの小さな物語を無数に創造しています。でも、多くの人が自分が無数の物語を創造しているという認識をもつことがありません。勿体ない事です。

ギター文化館

2008 CONCERT SERIES

The 15th anniversary

12月 7日 マリア・エステル・グスマン ギターリサイタル

12月14日 ロス・トレス・アミーゴス フォルクローレコンサート

ギター文化館

〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

0299 - 46 - 2457

Fax 0299 - 46 - 2628

Coffee & Tea Room

《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦・蕎麦会席料理のお店です

(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが皆さんをお迎えいたします。

営業時間 11:30 ~ 15:00

16:00 ~ 18:00

月・木曜日が定休日です。

電話 0299 43 6888

編集事務局

〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

(白井啓治方)

ギター文化館発：ことば座第11回定期公演

新鈴が池物語（2008）

12月21日（日曜日）開演午後2時

小林幸枝の十八番物「新鈴が池物語」が居合夢想神伝流の池田忠男（2004年居合道日本一）とともに今年も帰ってくる。野口喜広の奏でる大地の声オカリナに乗って小林幸枝が希望の鈴姫を朗読に舞い、池田忠男が不毛な怨嗟の終焉を演武に介錯する。

第一部 朗読舞劇「新鈴が池物語」（2008）

第二部 野口喜広オカリナ・コンサート

鈴が池怨念

貴女は誰ですか
澱んだ池の蛇ですか
疎まれて嫌われて恨みつのもつて…
もう、終わりにしましょう
やつれた姿の見えてます

いつも地獄ですか
紅蓮の大蛇の舌ですか
負け戦城落ちて一人残って…
もう、誰もいません
雄叫びも遠く消えています

醜い姿ですか
情念に狂う蛟ですか
毒を吐いて命奪って呪続けて…
もう、城跡はありません
貴方の名さえ知りません

（打田昇三作詞）

鈴姫・情恋の舞い

もう恨みますまい。お許しも請いませぬ。
この触れ合う肌の温もりが私のすべてです。
これが人の世なのですね。
これが生きることなのですね。

前売りチケット（2500円）は、ギター文化館（0299 46 2457）、いしおか補聴器（0299 24 3881）にて取り扱っております。

なお公演当日は、ことば座を支援いただいている松山自給農園の甘い石焼き芋販売が行われます。

ことば座 〒315-0013 茨城県石岡市府中5 1 35
0299-24-2063 fax 0299-23-0150